

Mr. Bassman (ベースマン列伝) vol.4

ジャズにおいてベース弾きとは、縁の下力持ち、水先案内人といったや日陰の存在。おまけに、ウッドベースなら持ち運びも大変…。だが、黙々とベースをウォーキングさせ、バンドをスイングさせることに魂を注ぐベースマンが、一度化けの皮を剥くとももの凄い名演・名盤が生まれるのだ。このコーナーでは、そんなジャズ・ベースマンの偉業を称えとともに、ジャズ・ベースの素晴らしさを伝えていきたい。

Paul Chambers【ポール・チェンバース】



Photo by Francis Wolff (c) Mosaic Images

Profile

1935年4月22日、ペンシルヴァニア州ピッツバーグ生まれ。本名はポール・ローレンス・ダンバー・チェンバース・ジュニア。同じくジャズ・ベーシストで、62年に27歳の若さで交通事故死したダグ・フトキンスとは従兄弟同士。幼い頃にデトロイトに移住。学生の頃にバリトン・ホーンとチューバを習得。14歳の頃にベースに転向し、デトロイト交響楽団のベース奏者に師事。同郷のケニー・バレル、バリー・ハリス、サド・ジョーンズ等と共演を重ね、54年4月にNY進出。ベニー・グリーン、ジョージ・ウォーリントン、ポール・クイニシット等の有名コンボで活動。この頃、ドナルド・バードの紹介により、ブルーノートでJ.J. ジョンソンのレコーディングに起用され、その後もハウス・ベーシストとして活躍。55年10月にマイルス・デイビス・クインテットに参加。レッド・ガーランド (p)、フィリー・ジョー・ジョーンズ (ds) とのリズム隊は、往年のカウント・ベイシー楽団のリズム隊のニックネームにあやかって、「ニュー・アメリカン・リズム・セクション」と称された。後半は、ウイントン・ケリー (p)、ジミー・コブ (ds) と共に、63年の脱退まで同グループで活動。ジャズ史に残る数々の名盤でベースを弾き、優れたソロ作品を発表するなど、超売れっ子ベーシストとして活躍。64年7月、「ワールド・ジャズ・フェスティバル」出演のため、ウイントン・ケリー・トリオの一員として来日。67年からはフリーランスとして活動。69年1月4日、肺結核のためニューヨークの病院で息を引き取った。享年33歳。

モダン・ジャズの黄金時代を駆け抜けた偉大なるベースマン

《ミスター PC》

33年という短い生涯を閉じたポール・チェンバース。この世に多くの名演と永遠に枯れることのない低音の魅力を残してくれた偉大なベースマンだが、過度なドラッグやアルコールの摂取がその命を縮めたことは否定出来ないだろう…。

だが、ジャズの歴史を飾った数え切れぬほどの名盤でのクレジット数を見ても、このベースマンが如何に引っ張りダコであったかは一目瞭然。同時に、ジョン・コルトレーンの「Mr. P.C.」、ソニー・ロリンズの「Paul's Pal」、レッド・ガーランドの「The P.C. Blues」など、ミュージシャン仲間から直々に贈られたナンバーも多く、この男がどれだけ愛され信頼されたかが窺える。ステージ以外でも、やんちゃなエピソードが残されているPC。今となってはその全てがモダン・ジャズ黄金時代の伝説となりつつあるが、そのダイナミックかつ華麗、強靱かつ豊かなベース・ワークは、まさにワン・アンド・オンリー！

そんなPCに憧れる気持ちから、ニューヨークで一年近くかけて、大好きなPCの代表的名盤『ベース・オン・トップ』のジャケット裏に、その作品の共演者でもあるケニー・バレル (g)、ハンク・ジョーンズ (p)、アート・テイラー (ds) のサインを貰い歩いたこともあった。誠に失礼な話だったのかもしれないが、その3人の偉大なジャズメンが、共に快く懐かしそうにサインに応じてくれたことは涙が出るほど嬉しかった。今更何やんでも仕方がないが、一度でもPCの生の演奏を拝みたかった。

《動くポール・チェンバース》

PCの演奏シーンを映像で見たいなら、Miles Davis『Cool Jazz Sound』(DVD)がお薦め！この映像は、1959年のマイルス・デイビス・クインテットとギル・エヴァンス・オーケストラとの共演を収めたR・ハーリッジのTV番組で、ビデオ映像で知られる『The Sound Of Jazz』をDVD化したもの。「So What」「Duke」「Blues for Pablo」「New Rhumba」の4曲収録。中でも「So What」は涙もの！PCは勿論、若きマイルス & コルトレーンに、ウイントン・ケリー、ジミー・コブの姿も拝めるという貴重な記録だ。

《ポール・チェンバース初来日！》

1964年7月、「ワールド・ジャズ・フェスティバル」出演のため、Wynton Kelly Trioの一員として初来日したPC。この時はPCの後任ベーシストとしてRon Carterが加入したMiles Davis Quintet も一緒に来日となった。この記念すべきPC初来日時の模様を窺い知る上で、とても貴重な興味深いエピソードが珍しい写真と共に掲載されているのが、日本が誇るジャズ・ベーシスト、鈴木勲さんのOfficial Site [http://www.w5d.biglobe.ne.jp/~isoajazz/] 上の「Tsao's History: 鈴木勲物語 (第05弾)」是非チェックして欲しい！

PC's Leader Album

『Paul Chambers Quintet』(1957年 Blue Note 録音)、『Go』(1959年 VeeJay 録音)、幻のレーベル Jazz West や Transition の音源を収めた『Chambers' Music』等もお忘れなく!



Whims Of Chambers
Paul Chambers Sextet
(東芝 EMI: TOCJ-6459)

Paul Chambers (b), Donald Byrd (tp), John Coltrane (ts), Kenny Burrell (g), Horace Silver (p), "Philly" Joe Jones (ds)

1. Omicron 2. Whims Of Chambers 3. Nita
4. We Six 5. Dear Ann 6. Tale Of The Fingers
7. Just For The Love

PC がブルーノートに吹き込んだ計 3 枚のリーダー作のうち、記念すべき第一弾となった 1956 年の録音作品。PC をブルーノートのアルフレッド・ライオンに紹介した D・バードをはじめ、J・コルトレン、H・シルバーの顔ぶれが参加している点も興味深い。タイトル・ナンバーを含めた 3 曲のオリジナルを披露する PC の作曲面での才能も光る。オープニングを飾る D・バード作曲の「オミクロン」のカッコ良さを是非聴いて欲しい。若きコルトレンからバトンを受けたドライブ感漲る D・バードのラッパ、続く K・バレルの哀愁のギターと若きスター・プレイヤー達のエナジーが流れるこの一曲だけでジャックアウトされ! そして、ややビビるような PC の独特のベース音も印象的だ。



Bass On Top
Paul Chambers Quintet
(東芝 EMI: TOCJ-6407)

Paul Chambers (b), Kenny Burrell (g), Hank Jones (p), Art Taylor (ds)

1. Yesterdays 2. You'd Be So Nice To Come Home To 3. Chasin' The Bird 4. Dear Old Stockholm 5. The Theme 6. Confessin'

むせび泣くケニー・バレルのギター、哀愁漂うハンク・ジョーンズのピアノ、アート・テイラーの太鼓が語りかけ、PC のベースが歌う。PC の真骨頂であるホーンライクなピチカート・ソロ〜骨太なグルーブが漲るウォーキングによるバックグラウンド、個性的なアルコの音色でモダン・ベースの魅力を感じてくれる名盤の中の名盤。何と言っても「ディア・オール・ストックホルム」がいい。スウェーデン民謡のこの曲は、PC の葬儀でも 7 人のベースマンによって演奏され、参列者の涙を誘ったと伝えられる。「イエスタイズ」のアルコ、「ユード・ビー・ソー」のウォーキングといい、PC のベースの魅力が所狭しと詰まった 1957 年 PC 若干 22 歳の記録。驚愕…!



1st Bassman
Paul Chambers
(Collectables: COL 7152)

Paul Chambers (b), Yusef Lateef (ts), Tommy Turrintine (tp), Curtis Fuller (tb), Wynton Kelly (p), Lex Humphries (ds)

1. Melody 2. Bass Region 3. Retrogress 4. Mopp Shoe Blues 5. Blessed 6. Who's Blues

サイドマンとしてだけでなく、ソロにおいても名盤を残している PC だが、意外に紹介されること少ないのが、1960 年に VeeJay からリリースされたこのアルバム。PC の卓越したベース・ワークは他のソロ作品にも全く劣っていない。盟友 W・ケリーに、C・フラー、Y・ラティーフ、T・タレンティンの 3 管をフロントに据え、様々な色彩を放つサウンドとそのベース・プレイは聴くものを唸らせる。ハンプリーの堅実なドラムも渋い。マイルス・クインテットが一時的に解放された PC の自由奔放でやんちゃで溢れ出るような豊かなフレーズ満載のベース音の何と気持ちいいこと! 「Mopp Shoe Blues」は絶品! 顔に自信があったのか、珍しい本人の顔アップのジャケ写もインパクト大。

PC's Support Album

モダン・ジャズの名盤と称されるアルバムを数枚手に取れば、ベースリストに必ず PC の名前を見かけることだろう。迷うなんてもんじゃない程の作品群の中から以下の 6 枚を厳選した。



'Round About Midnight
Miles Davis
(ソニー・ミュージックジャパン・ナショナル: SICP-810)

マイルス・クインテット在籍時の作品は全て聴いて欲しい。その中でも「クール」的このアルバムは、最高傑作のひとつ。TVCM で話題となった「Bye Bye Blackbird」収録。1955~56 年録音。



Giant Steps
John Coltrane
(ワナーミュージック・ジャパン: WPCR-25023)

コルトレン独自の奏法、必殺「シーツ・オブ・サウンド」を完成させた歴史的な名盤。ここからコルトレンの神懸けた快速連打が始まる。コルトレンが捧けた名曲「Mr. P.C.」も収録。1959 年録音。



Groovy
Red Garland Trio
(ビクターエンタテインメント: VICJ-41232)

独特で粋なスイング感を醸し出す R・ガーランドのピアノが最高! 脳を固める PC と A・テイラーと共にピアノ・リリオの極意を伝える。グルーブ感漲る「C ジャム・ブルース」他、名演満載。1956~57 年録音。



Cool Struttin'
Sonny Clark
(東芝 EMI: TOCJ-6401)

まずはこの有名なジャケット。これだけで面白いだろう。そして、PC はファミリー・ジョーとの名コンビで参加。「ブルー・マイナー」での J・マクレーンのソロも最高! S・クラークの代表作だ。1958 年録音。



Kelly Blue
Wynton Kelly Trio & Sextet
(ビクターエンタテインメント: VICJ-41231)

ベーススト必聴の 1 枚! 後にマイルスの元から共に離れることになる盟友ウィントン・ケリーの代表作。ウィントンのブルーザーなピアノと PC のベースの相性は流石に文句なし! 1959 年録音。



Soul Station
Hank Mobley
(東芝 EMI: TOCJ-6424)

爽快で重たない所がいい。W・ケリー(p)、A・ブレイキー(ds)と PC のベースに乗って軽快に歌う H・モブリーのテナーが好きだ。「Remember」「This I Dig Of You」など名演揃い。1960 年録音。